

医学考証学派の成立と展開：多紀家を中心に

成 高雅

要 約

本研究は、江戸後期の医学考証学派の代表である多紀家、特に多紀元簡(1755-1810)・元胤(1789-1827)・元堅(1795-1857)三人の著述・蔵書・関連資料を中心に、医学考証学派の成立と展開を考察したものである。全六章から成る本研究の各章では、多紀家に関する様々な文献資料の整理・分析を通じて、その学術的特質を明らかにし、医学考証学派の成立と展開の実像を明らかにする。

第一章「多紀家の著述と関連資料」では、多紀家の著述と蔵書の全体像を把握するため、現存する著述と関連資料の調査と整理を行った。多紀家の著述を検討する際、先行研究を踏まえて、従来注目されてこなかった稿本・写本資料も含めて調査・整理を行い、その学術活動の諸側面を明らかにした。これらの写本資料は多紀家学問の蓄積と継承の過程を具体的に示す重要な資料である。また彼らの未刊の著作群は、本研究によってその価値が明らかとなった。多紀家の学問的基盤の全体像を解明するために、蔵書目録・蔵書印などの資料も整理した。次に、富士川文庫を中心に多紀家の関連資料を検討した。着目した資料は、多紀氏の自筆・校正など加えた手沢資料が大半に及ぶ。こうした調査・整理することにより、多紀家の知的基盤と学問の復元が可能となる。

第二章「多紀元簡の『樞中鏡』」では、多紀元簡が編纂した蔵書に関する著作『樞中鏡』の諸本を調査・検討し、その成立と展開を明らかにした。現存する伝本を四つの系統に分類し、当書の諸写本における伝播の過程を跡付けた。諸伝本の検討により、江戸後期の知識人の間で『樞中鏡』は写本として広く読まれていたことが判明した。本書は蔵書のマニュアル的参考書として編纂されたが、内容は単なる蔵書関連の記事集成にとどまらず、蔵書家の収書経歴、書誌学的論述、版本の優劣判断、書店や書市の様子、校正・補訂に関する記録、書物の装訂・保護に関する情報など、多岐にわたっている。また収録された72篇の文書のうち66篇が明清の書物からの引用であり、特に当時最新の清朝の学術成果への強い関心を示している。また、『樞中鏡』にみる多紀元簡の蔵書志向と元簡の学術的アプローチについて検討を試みた。多紀元簡と明清の学術との邂逅は、多紀家ないし医学考証学派の学術的転換の兆しを示すものであった。

第三章「多紀元胤の『体雅』『薬雅』『疾雅』」では、元胤が「雅」の名を冠して執筆した三つの著作を検討した。三書について、現存伝本の調査と概略を行った。『体雅』は人体部位の名称に関する考証的辞書で、全3巻からなり、頭部109項目、軀幹部60項目、四肢部69項目を収録し、各項目について『素問』『靈枢』などの医書や『爾雅』『説文』などの小学書からの引用を交えて、詳細な考証を行っている。特に注目されるのは、沈疴や畢沅など、清朝考証学者の成果を積極的に取り入れている点である。『薬雅』は元胤の未完著述となり、張仲景の処方用いられる36種の薬物について、その性味・効能を解説し、「釈義」「述古」「正訛」の項目を設けて経方薬物の効用を論じた本草書である。30種以上の写本が現存し、江戸後期から明治期にかけて医家や知識人によって書写・収蔵されていた。『疾雅』は未完の稿本二種が現存し、病証名に関する考証的辞書となり、病証名の分類・解釈と考証を系統的に企図されていた著述である。内容も医書の引用の他、『爾

雅』『広韻』『玉篇』『説文』などの小学書また正史からの引用が多く見られ、特に病証名にある字義を訓釈することが多く、詳細な考証が付いている条目も少なくない。『疾雅』は雅書の性質を持つ医学辞書である。多紀元簡『病名纂』『病名沿革攷』から元胤の『体雅』まで、元胤が元簡の学術への継承と発展が窺える。『体雅』『薬雅』『疾雅』のうち、『体雅』『疾雅』は雅書の性質を持つ医学辞書であり、『薬雅』は「雅」の名を借りた本草書である。『体雅』『疾雅』は日本の学者が漢文を使って編纂した専科の雅書として、雅書史において重要な意義を持つ。また、三雅の編纂により、元胤の強い考証志向と小学的傾向も反映されている。

第四章「『扁鵲倉公伝彙攷』をめぐる考察」では、多紀元簡が著し、元胤が補遺し、元堅が増補・校訂して1849年に刊行された『史記』扁鵲倉公列伝の注解書『扁鵲倉公伝彙攷』について検討した。本書の編纂過程における各自筆稿本を調査・整理した結果、元簡初稿本・元胤稿本・元堅校訂本など、複数の段階の稿本が現存することが判明し、稿本における編纂・修訂過程が明らかになった。元簡から元堅に至る注釈には、それぞれ学術手法の傾向が違い、引用資料と注釈内容にそれぞれの特徴が見られる。特に注目すべきは、元堅の補注に銭大昕『二十二史考異』(1797)『十駕齋養新録』(1806)、王引之『経伝釈詞』(1798)『経義述聞』(1817)、段玉裁『説文解字注』(1808)など、清朝乾嘉学者の考証学研究成果が大量に引用されており、考証学派の学者が清朝考証学への関心及び乾嘉の学を受容を示す重要な著述となっている。『扁鵲倉公伝彙攷』は、多紀家二代三人にわたる考証学研究の結晶とも言えるべき力作であり、長年にわたって蓄積してきた考証学の学術を集大成したものであり、その意味で、多紀家の学問的到達点を示す重要な著述とも言える。

第五章「多紀家の文集」では、多紀元簡の『櫟蔭草堂文集』と多紀元胤の『柳汧文藁』を取り上げ、両書の諸本と内容を検討した。『櫟蔭草堂文集』は多紀元簡が作った序・跋・書・論・説・医案・記・墓表・銘・賛・詩などを収録している。収録された内容が多岐にわたり、当時の知識人ネットワークの広がりを示している。多紀元胤の『柳汧文藁』も同様の構成を持ち、医書への序跋を中心に、考証・医案・詩なども収録している。また、多紀元堅も『丹波元堅集』という文集が存在するはずだが、現在は所在不明となっている。これらの文集は、医学的内容を多く含みながらも儒者的な文集の形式を採用しており、ここからは医学の権威でありながら、より広い知的文脈における学術活動の記録を残そうとした多紀家の自己認識を読み取ることができる。

終章では、本研究において明らかにした内容をまとめ、それを踏まえて、今後の課題について提示する。医学考証学派の成立と展開において、以下の点が明らかになった。第一に、医学考証学派は、同時代の清朝考証学と密接な関連を持って成立・展開した。多紀家は清朝考証学の最新成果を積極的に摂取し、その方法論を医書研究に応用した。特に小学的手法の重視は、清朝考証学の影響を強く受けたものと考えられる。これも、多紀家が中国学術への高度な関心、積極的な摂取と深い理解があるからである。第二に、医学考証学派の学問は、広い知的文脈の中で展開された。多紀家の蔵書や著述からは、医学・儒学など多岐にわたる学問領域への関心が確認でき、それらを統合した独自の学問体系を構築していたことが明らかとなった。これも清朝考証学、特に乾嘉の学の発展と軌を一にするものであり、江戸後期における学術の一つの到達点を示すものとして評価できる。第三に、医学考証学派の展開には、幕府医学館という制度的基盤が重要な役割を果たし、日本特有の医者・儒者等の知識人ネットワークがもたらした密接な学術交流も重要であった。多紀家は医学館を拠点として、書籍の収集・研究・出版を行い、儒学者との交流を通じて学問を深化させた。

本研究は、江戸後期における医学考証学派について、その中心的存在であった多紀家の

著述と関連資料を広く検討することを通じて、従来の研究では十分に解明されてこなかった実態の解明を試みた。その結果、江戸後期における医学と儒学の交渉、および日本における清朝考証学の受容と展開の具体相を明らかにすることができた。多紀家の学術の実態解明は、近世日本の学術史研究に新たな視座を提供するものである。今後の課題として、国内外の諸機関に所蔵される未調査の多紀家関連資料の網羅的な調査・検討、多紀家以外の医学考証学派の学者や儒学者との知的交流ネットワークの全容解明、そして多紀家関連資料のデータベース構築やデジタルアーカイブの制作など、人文情報学的アプローチによる研究基盤の整備が挙げられる。これらの課題に取り組むことで、より広範な資料調査と精緻な分析を重ね、本研究テーマについてさらに深い理解が得られることを期待したい。